

寒暑風雨之時候、必有遲速、不可拘以日數、然則梅雨出入之期、雖出乎華夏之書、恐不可據信、孟子曰、盡信書不如無書、誠哉此言乎、只以芒種之後、霪雨初降之日爲入梅、以霪雨收斷之日爲出梅、庶幾乎其不差矣、十月液雨亦恐然也、

〔民間年中故事要言〕<sup>四</sup>梅雨 或人云、ク、梅雨ハ和歌ニイフ五月雨、中世ニハ墜栗花、今ノ俗ニ通油ト云、

〔改正月令博物筌〕五月梅雨出入の説中略按ずるに、五月梅まきに、黄み落んとす、栢榴の花ひらき、師烏丸中立賣下町すといへども、かたまた、大徳寺門前の石人、家へまじり、物かびを生ず、雷鳴を以て出梅とす、京に井あり、徑三尺深サ一尺、梅雨に入て水必わく、出梅の比水かほく也、

梅雨天氣 梅雨は多く西風南風にて、山の端に雲なく、風つよき時は、ふらさず、風なき空に雲多く、吹ば、空も白くなる、是を船趕風といふ、雨はるい也、雨やまんとして、はげしく雷鳴、これを順とす、然といへども、梅雨の内、雷おほく鳴ば、洪水を主る夜鳴り、或は沖へなり入も、雷鳴は、すべて宜かず、

〔世事百談〕梅雨 梅雨の節に入るを入梅といひ、あくるを出梅といふ、芒種五月の前の壬を入梅とし、小暑六月の後の癸を出梅とするよし、本草綱目に見えたり、まかれども、時として、陰晴定まらず、時節のわかちがたきことあり、其時には、花葵の花咲きそむるを入梅とし、だんく標のかたに花の咲き終るを梅雨のあくるとし、るべし、曆は算法に拘泥することなきにあらねば、天時の花草にて、節氣を知ること、正しとかや、ためし試むるに、たがふことなしとある人いへり、〔年中行事故實考〕<sup>五六</sup>入梅 五月の節に入て、壬の日を入梅とし、六月に入て、壬の日を出梅とす、是今貞享曆の用ゆる所なり、諸家の説紛々たりといへども、不足採、

〔視聽草 六集 九〕入梅説

一甲乙年は芒種之節より、二つめの壬に入、微雨之間廿一日、